

# Academic Portfolio

## 2013



※ 3Dソフト「Shade」で作成した「生け花」の動画作品(2000年)

第2回 佐賀大学 アカデミック・ポートフォリオ・ワークショップ  
2013年9月19日(木)～21日(土)

佐賀大学 全学教育機構  
藤井 俊子  
fujiit@cc.saga-u.ac.jp

# 目 次

1. はじめに
2. 教育
  - 2.1 教育の責任
  - 2.2 教育の理念
  - 2.3 教育の理念を実行するための方法
  - 2.4 教育の成果・評価
  - 2.5 教育を改善するための努力
3. 研究
  - 3.1 研究概要
  - 3.2 発表された研究の代表例 ー論文ー
  - 3.3 発表された研究の代表例 ー口頭発表ー
  - 3.4 獲得した研究資金
  - 3.5 他者からの評価
4. サービス、社会貢献
  - 4.1 所属機関におけるサービス
  - 4.2 社会貢献
5. 統合
  - 5.1 3つの活動の関連
  - 5.2 3つの活動の統合
6. 特に誇りとする3つの成果
7. 今後の目標
  - 7.1 短期目標
  - 7.2 長期目標
8. 添付資料・参考資料

## 1. はじめに

### AP 作成の目的

「大学教員」という職業についている現在の自分の業務内容の整理をするとともに、「大学教員」としてできること・できないこと、「大学教員」の枠を超えて、自分が今後できることを整理し、それを伝える（アピールする）ことができるようなポートフォリオを作成する。

### プロフィール

現在の「大学教員」としてのアカデミック・ポートフォリオをまとめる上で、それまでの経歴は欠くことができない。業務経歴・履歴書【添付資料(a)】に記載しているように、大学で専攻したプログラミングの技術をもとに、社会人としてスタートを切るが、学生時代から始めたジャズダンスのインストラクターや振付アシスタントを、転勤するまでの約 12 年間仕事と両立して行っている。企業内でのプログラミングや情報処理に関する教育、アプリケーション・システムのユーザ教育、パソコンのインストラクター等の教育に携わるとともに、自身のデジタル技術習得のために専門学校で学び、これらの技術を生かして大学教員になるための資格として博士号を取得した。また、その時々で必要な学びを行い、その証明のために資格を取得してきた。表紙の『3D ソフト「Shade」で作成した「生け花」の動画作品』は、デジタル技術を学び始めた時期の作品で、照明をプログラムで制御している。

その後、「大学職員」という立場で、eラーニングを使った大学教育に携わり、システム構築、コンテンツ作成とともに、eラーニングにおける「メンター」という仕事を確立してきた。ここで言うメンターとは、『学生や教員の教育・研究に関する活動を支援する役割を担う者で、円滑な教育・研究活動に必要な人材』と位置付けている。

現在は「大学教員」として勤務しており、「教育・研究・サービス」のすべての分野において、「ICT (Information and Communications Technology) 活用教育」を構築・実践し、その中でも主に Moodle という学習管理システム (LMS: Learning Management System) を、「学習管理」だけでなく学習・教育活動の様々な場面で活用している。ICT 活用教育とは、「ICT を活用するための教育」であるとともに、「ICT を活用して行う教育」でもあるという考えのもとに、LMS を構築し、学生だけでなく教員に対しても LMS 講習を提供している。

## 2. 教育

### 2.1 教育の責任

初めて教育に携わったのは、社会に出て入社2年目の1984年から行ったプログラミング言語 FORTRAN の言語研修である。その後、設計データ管理システム等の自社開発ソフトの開発に携わるとともにユーザ教育も行い、フリーでパソコンのインストラクターも経験した。このように、教育の経験は、ほぼ社会人としての経験と同等のキャリアがある。【添付資料(a), (b)参照】

前職の教務職員の職務について以来、eラーニングで単位が取得できるネット授業のサポートを中心にメンター業務を行っており、現在の業務を行う上でそれまでの教育に携わってきた経験とともに非常に役立っている。ここでは、大学における教育という意味で、メンターとして対学生だけでなく対教員も含めた教育活動についても記述する。【添付資料(c), (d)参照】

#### (1) 担当科目（副担当も含む）

##### ① 教育デジタル表現【添付資料(e), (f)参照】

2011年度から、主担当として開講している教養教育の主題科目（2013年度から、基本教養科目）で、全学部全学年対象。対面授業ではあるが、授業中・授業外を含めてLMSをフル活用し、学ぶ立場・教える立場双方からのeラーニングに活用について学ぶ授業である。

##### ② 「デジタル表現技術者養成プログラム」関連の授業【添付資料(f)参照】

2009年度から実施されている「デジタル表現技術者養成プログラム」では、副担当として、必須科目の「映像・デジタル表現Ⅰ（デジタル表現入門）」、「Web表現」、「映像表現」、「プログラミング表現」、「映像・デジタル表現Ⅳ（修了研究）」、選択科目の「インストラクショナル・デザイン（ネット授業）」、「プロデューサー原論」、「授業支援入門」を担当している。また①の「教育デジタル表現」も、このプログラムの選択科目である。

#### (2) eラーニングのメンター業務について【添付資料(g)参照】

##### ① フルeラーニング型ネット授業「インストラクショナル・デザイン」

フルeラーニング型ネット授業とは、ガイダンスと定期試験以外は原則としてすべてeラーニングで構成されている授業である。現在ネット授業の運用は教務補佐員に任せているが、初期のガイダンス、要所での授業サポート、新しい教材や授業方法の検討については、現在も行っている。

また、「インストラクショナル・デザイン」に関しては、副担当教員として、

質問への回答、課題や試験への対応、成績管理なども行っている。

## ② ブレンディッド型ネット授業のサポート

現在開講されている「英語」では、ネット授業の運用は教務補佐員に任せているが、初期のガイダンス、要所での授業サポート、新しい教材や授業方法の検討については、現在も行っている。2013年度後期から開始される E-TOEIC コースの設計も行っている。また、同じ E-TOEIC コースを、必須ではない形でネット授業のクラスにも提供している。

## ③ LMS を利用した対面型授業のサポート

「デジタル表現技術者養成プログラム」の LMS を使用する科目では、副担当でない科目でも運用に関わっている。その他、LMS を活用した「パブリックスピーキング I」では、英語教材を作成する授業を提案し、導入を試みた。(担当教員退職のため、現在は実施していない。)

## 2.2 教育の理念

### (1) 「学ぶこと」は「生涯学習」である

大学教育では、学生へ理解させることの重要性、責任がある。それとともに、自学学習の習慣や手法を教えることで、卒業し社会人になっても、日々学習を重ねていける人材を育てることも重要だと考える。私自身、社会に出てから必要に迫られて、また興味を持って、様々なことを学び、資格を取得し仕事に生かしてきた。幅広い知識は、職業選択の幅も広がり、そこから新しい世界も見えてくる。

eラーニングは教育のためのひとつの「ツール」であり、教科書と黒板と白墨で行ってきた授業スタイルの幅を広げるものだと考えている。教員も常に新しいことを学ぶことで、より良い教育の可能性が増すと考える。

### (2) ルールの遵守はすべての基本である

学生も教員も職員もすべて「大学」という組織に属している。その組織の中でのルールを守ることは、社会人として最も重要なことのひとつである。最近大学では単位の実質化が叫ばれ、「2 単位のためには実質〇時間の学習が必要」でそのため厳密に何時間学習したかを数値化することも検討されている。しかし私が問題にしているのは、「出席しなければならない授業に出る」、「課題の締め切りを守る」、「他人のレポートをコピーしない」など、社会人として守るべきルールをきちんと守ってほしい、ということである。これは、教員が「シラバスを期限までに提出しない」、職員が「教務システムの変更をアナウンスしない」など全ての構成員に関わる問題である。

社会人として職務を遂行する場合、無駄な会議に出席し、無理な締め切りを厳守し、納得できない成果物を公表する等の場面に、頻繁に遭遇する。そのときに、「しない・できない」は正当な理由があっても認められないことが多い。その組織でのルールを守るとともに、無駄な会議から何かを得る、限られた時間ででき得る最良のことを実行することが求められている。したがって教育に限らず、ルールを守るとは社会生活の基本である。

### **(3) 情報の共有と選択が重要である**

前記 2 項を踏まえたうえで、学生に自分で学び問題解決ができる力をつけてもらうためには、できる限りの情報提供を行う必要があると考える。また、教員へは、例えば e ラーニングをはじめとするツールを授業で使用するメリットや使用方法などの情報提供を行えば、授業改善に役立ててもらえる。しかし、現状では「ロコミ」に近いものがあり、大学として一元化された情報共有の場がない。永年専門の研究を行ってきた教員には、有益な情報を共有することを嫌う傾向も見られる。最終的に有益な情報かどうかは、情報を得た教員や学生が行う。大学で教育を行う上で共有すべき情報を提供する一元化された場をつくり、活用することが重要である。

### **(4) 効果的な教育には支援者が有効である**

従来の大学の授業は、教員と学生で成り立っており、教育の中にメンターや職員が介在することはほとんどなかった。しかし、e ラーニングを含めて、教育をより効果的に円滑に実施するためにはメンターが必要であると感じている。教員・職員・学生のかかわりを円滑にするだけでなく、積極的に授業改善を提案し、それを実現したことにより、教員は専門的な授業を実施することに専念でき、職員も無駄な作業を軽減することができ、学生の授業に対する満足度が上がれば、専任のメンターが存在する意味は大きいと確信している。

## **2.3 教育の理念を実行するための方法**

### **(1) 生涯学ぶために**

対面授業のように直接教える学生に対しては、今学んでいることは将来どのような場面で活用できるかを例示し、様々な場面で応用することができるという可能性を示唆している。様々な職種の経験をもとに、「学んだことや経験したこと無駄はない」ことを示し、プラス  $\alpha$  を自分で学ぶように促している。また、ポートフォリオ活用の一環として、授業の前後での振り返りを実施し、授業および自学学習でどのような学びを行っているか記録できるようにしている。

教員に対しては、特徴的なeラーニングの使い方を行っている科目を、モデルケースとして論文、講演等で広く紹介している。また、モデル授業という形で全面サポート協力をしている授業もある。教員への直接の支援や啓蒙活動では、賛否の議論はあるにしても時代の流れに取り残されないように、学ぶための情報提供・共有を促進するよう努力している。

## (2) ルール遵守のために

すべての授業でLMSを使用しているが、学生のアクセス状況・学習状況が詳細に記録されている。そのことを学生に伝えて、学生に課題の提出期限を守ること、きちんと準備をして授業に臨むこと、を強調している。学生が成績管理にも使用されている個人のIDでアクセスするため、ネット授業だけでなくPCを使用する対面授業でも手軽に確実に出席を取ることができる。

ガイダンスでは、その授業でのルールの内容、ルールを守らなければどうなるか、などと詳細に記述するとともに、ネット授業では「チェックテスト」というものを行って、○×式で解答することで内容を印象付けるようにしている。

## (3) 情報共有のために

学生に対しては、ガイダンスの説明資料、授業のマニュアル、科目ごとのシラバス、など一度聞いただけでは忘れてしまったり、聞き逃してしまったりで、履修に影響を及ぼすような資料は、いつでも参照できるようにし、質問されても、情報がある場所を自分で調べるように促している。

教員に対しては、特徴的なeラーニングの使い方を行っている科目を、論文、講演等広く紹介しているが、関係者が参照できる情報共有の場を提供している。

## (4) 教育の支援者として

学部に所属してない特任のため、授業以外で直接学生に接することは少ないが、新入生へのラーニング・ポートフォリオの入力支援を行っており、ネット授業やLMSの講習を通して、ICT活用を支援している。

教員に対しては、積極的に授業改善を提案し、それをサポートすることにより、教員自身は専門的な授業を実施することに専念できるようになる。また職員との間に入ることで、必要な書類を提出し忘れないようにし、無駄な作業を軽減することができるようになる。学生の授業に対する満足度が上がれば、専任のメンターが存在する意味は大きいと確信している。

## 2.4 教育の成果・評価

すべての授業で、大学の授業評価とは別に授業評価を行い、学生の声を取り入れるようにしている。

教養教育の授業には、対面の授業で出席を毎回きちんととることが大変な大人数の講義もあるが、LMSを使った授業ではアクセス状況が自動的に記録され、その履歴で履修の細かな状況まで把握することができるので、個別の対応に時間を取ることが可能になる。これは教員だけでなくメンターのサポートにおいても同様である。

メンターは直接授業の成果を求められることはない。また、メンターに対する直接的な評価も特に得られるわけではない。しかし、ネット授業の受講者は毎年増加しているが、学生からの問い合わせやクレームが年々減少し、多くの学生がスムーズに受講できていることは、成果として挙げられる。また、教員からのねぎらいや感謝の言葉、自身の授業改善に対する積極的な相談などに遭遇するたびに、メンターとしての業務が求められ評価されていると感じている。

## 2.5 教育を改善するための努力

### (1) 自分自身の生涯学習

いままでも、環境や状況に応じて、新しいことを学び、向上心をもって学習し資格取得に挑戦してきた。【添付資料(a)参照】 2010年8月に大学教員になってから「ポートフォリオを利用した学習・教育支援方法の開発および実践」という未知の分野に挑戦することになったが、「特任」に許される限りの権限で開発と運用に携わってきている。専門的な知識がない代わりに、他の人が経験したことのない特別な経験を持っている。そのために、常に新しい未知のことを要求される立場にもある。これからも積極的に必要な情報の収集をし、研修に参加するなどして、さらなる向上を目指している。

また、教育およびメンタリングの能力を高めるために、より多くの教員や学生の声を聞き経験を積むとともに、他の教員やメンターの手法も学ぶ必要があると考えている。【添付資料(g)参照】

### (2) eラーニングのメンター業務の改善【添付資料(g)参照】

eラーニングのメンター業務に関しては、現在のメンター業務を行っているスタッフに対するメンター（アドバイザー）として改善に関わっている。特に大学の教育改革・組織改革に左右される問題でもあり、一概に「改善」とはいえない改革もあるが、「学生のための教育」を忘れずに対応していく必要がある。



### 3. 研究

#### 3.1 研究の特徴

「ICT 活用教育の構築」

目的：ICT 活用教育の普及

意義：eラーニングを始めとする ICT（情報通信技術）を、教育を実践する際にツールとして利用し、教育効果を上げる。

教育活動のほとんどが、そのまま研究活動にリンクしている。現在プロジェクトの一員として携わっている 8 大学連携事業【添付資料(h)参照】での活動も含めて、具体例を挙げながらその内容を整理する。

##### (1) LMS サイト構築・管理

使用している Moodle は、オープンソースの特徴として、頻繁にバージョンアップがあり、機能の変更も著しい。今までの機能も保障されないため、苦勞してカスタマイズしたプログラムも使えなくなる場合がある。その検証と、利用のための新しい方法を考えだすことは、重要な研究課題のひとつである。

##### (2) eラーニング教材作成

eラーニング教材を作成する際には、それを提供するシステムの特徴を研究し、利用環境を検証し、その環境に合わせて教材にも改良を加えていく。また、教材の利用者の知識・スキルによっても変更を加える。

##### (3) コース設計、学習者・利用者のための資料作成

同じシステムや教材でも、マニュアルや講習会のための資料は、その対象者によって内容が異なる。それは、教育を行う環境や目的によっても変化する。同様に、eラーニングで教育を行う場合のコース設計もその状況ごとによって変わる。その状況を見極めてコース設計をし、その情報を提供することも研究対象のひとつである。

##### (4) システム連携

LMS と英語教材が提供されているシステムの連携、ポートフォリオ・システムとの連携、機能分担も研究対象のひとつである。すでに存在するシステムの同様の機能を併用して運用するのは、利用者の混乱を招き、利用の普及のブレーキとなっている。どのような運用が良いか、受講者・管理者・支援者など様々な立場での利用方法を研究する。

大学教員の中には、「私は教員免許を持っていないので、教育のプロではない。」「教えることを学ばずに教員になったので、教育に自信が無い。」という人が多く見受けられる。しかし、教育を行うことで収入を得ている「大学」という組織において、「大学教員」という職業についているからには、教育のプロで

なくてはならない。一方、「教育のプロ」である教師を育てている教職課程を受け持つ教員のなかには、学生が自然に使っている ICT に対して拒否感を持っている者も少なくない。これらすべての教員に対して、「ICT の活用」を「教育」に取り入れる方法を紹介し、個々のニーズに対応できるように例示することにより伝え、うまく活用できる環境を整えることが、大学や社会全体の教育環境を向上することにつながると考えている。

いままで様々な実践は行ってきたが、教育効果を測定する方法が確立できていない。この「教育効果を評価する」ことが今後の研究課題のひとつでもある。

昨年から、日本協同教育学会の勉強会に参加し、協同学習を学ぶ機会ができ、アクティブ・ラーニングと ICT 活用教育との融合を模索している。

### 3.2 発表された研究の代表例 ー論文ー 【添付資料(b)参照】

(1) 藤井 俊子, 早瀬 博範, 草場 千穂子, 齋藤 夕希子, 穂屋下 茂, 「eラーニングを用いた英語教育における音声提出課題の効果」, 『日本リメディアル教育学会論文集』, 4-2 (2009-9) , 187-194. 【添付資料(b-1)参照】

【理由】「ICT のメンター・教育実践に関するもの」の「ブレンディッド型の英語教育に関するもの」(論文業績の分類 1-1) の主要論文。現在も授業改善を重ねながら実践している「ブレンディッド型ネット授業」の実践報告で、「読む・書く・聴く・話す」の 4 技能すべての課題を、対面授業だけでなく、eラーニングの課題でも実践した最初の報告であること。また、教員、メンター、TA が協力して授業を実践している一連の報告のひとつであること。これら一連の実践が、今年度から導入の「TOEIC を向上させるための学修支援事業」のもとになっている。

(2) 藤井 俊子, ミッチェル・ゾーニア・ルアン, 古賀 崇朗, 早瀬 博範, 穂屋下 茂, 「アカデミック・イングリッシュ向上のための eラーニング教材作成授業の試み」, 『日本リメディアル教育学会論文集』, 6-2 (2011-9) , 7-12. 【添付資料(b-2)参照】

【理由】「ICT のメンター・教育実践に関するもの」の「ブレンディッド型の英語教育に関するもの」(論文業績の分類 1-1) の主要論文。「ICT を活用した教育実践」(論文業績の分類 1-3) および「コンテンツ開発」(論文業績の分類 2-2) にも関連している。(1)とともにブレンディッド型の英語教育に関係するものだが、学生が英語の eラーニング教材作成を通じで、英語でのコミュニケーション能力や表現力などのアカデミックスキルを身につける授業ができるようになったこと。(3)で実践している教養養育の授業とも関連している。

(3) 藤井 俊子, 田代雅美, 穂屋下 茂, 「授業における LMS 活用の実践事例ー LMS 利用促進を目指した授業ー」, 『コンピュータ&エデュケーション』, Vol.31 (2011-12) , 66-69. 【添付資料(b-3)参照】

【理由】「ICT のメンター・教育実践に関するもの」の「ICT を活用した教育実践に関するもの」(論文業績の分類 1-3) の主要論文。学生が、教える(伝える)立場に立って「ICT を活用した教育」について考える授業の実践報告。特に LMS を利用した e ラーニングを学ぶ過程で、様々な手法を取り入れ、ポートフォリオやアクティブ・ラーニングでの ICT 活用教育にも関連している。

その他の論文実績については、「論文リスト (研究業績)」の「2. 査読付き学術雑誌論文」および「3. 国際会議論文」の項に記す。【添付資料(b)参照】

### 3.3 発表された研究の代表例 ー口頭発表ー 【添付資料(b)参照】

(1) 藤井 俊子, 古賀 崇朗, 田代 雅美, 穂屋下 茂, 「教養教育科目における自学学習と講義の振り返り実践報告」, 『2013PC カンファレンス in 東京大学』(2013-8/3-5) , 255-256. 【添付資料(b-4)参照】

【理由】ポートフォリオ活用の一環として、授業だけでなく自学学習でもどのような学びを行っているかを LMS 上に記録するように、授業の前後で振り返りを実施している。今後内容や方法を検討し、効果を検証する。

(2) 古賀 崇朗, 藤井 俊子, 田代 雅美, 米満 潔, 河道 威, 永溪 晃二, 久家 淳子, 時井 由花, 田口 知子, 高崎 光浩, 中村 隆敏, 角 和博, 穂屋下 茂, 「デジタル表現技術者養成プログラムにおける修了研究の評価方法の検討」, 『日本リメディアル教育学会 第 9 回全国大会発表予稿集 (広島修道大学)』(2013-8/29-30) , 136-137. 【添付資料(b-5)参照】

【理由】論文賞もいただいた取組「デジタル表現技術者養成プログラム」で、修了研究の評価方法を検討した実践報告である。難しいと言われている教育の評価をどのように客観的に行うかを模索している。

(3) 藤井 俊子, 早瀬 博範, フェルナー・テリー, マイヤー・ホーフ・アンドリュウ, 久家 淳子, 福崎 優子, 田代 雅美, 穂屋下 茂, 「e-TOEIC コース開講に向けてのシステム構築 ～ 佐賀大学版 Pre-TOEIC の実施 ～」, 『日本リメディアル教育学会 第 9 回全国大会発表予稿集 (広島修道大学)』(2013-8/29-30) , 190-191. 【添付資料(b-6)参照】

【理由】2013年度後期から開始される e-TOEIC コース開講に向けて、これまでの e ラーニングで培った知識・技術をもとにシステム構築を行っている。その一環として、初めて TOEIC-IP を受ける学生に対するサービスとして「佐賀大学版 Pre-TOEIC」を実施した報告で、今後 TOEIC-IP や 8 大学連携事業で作成している英語のプレイスメントテストとの相関を検証し精度を上げるとともに、学生への無料のサービスとして確立させたい。

その他の口頭発表実績については、「論文リスト（研究業績）」の「4. その他」の「学会講演論文集等」の項に記す。【添付資料(b)参照】

### 3.4 獲得した研究資金 【添付資料(h), (i)参照】

(1) 平成 23 年度科学研究費補助金の応募申請に係る A 判定インセンティブ

研究種目：基盤研究(C)

研究課題名：LMS による学習状況と成果を導入した e ポートフォリオの研究  
研究代表

(2) 平成 24 年度科学研究費（H24～H25）

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究課題名：LTD 授業を推進するための学生チューター育成プログラムと評価システムの開発

研究分担（代表：佐賀大学全学教育機構 教授 穂屋下 茂）

(3) 【大学改革推進等補助金】 大学間連携共同教育推進事業プログラム（H24～H29）

取組名称：学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進 <http://eight-univ.spub.chitose.ac.jp/>

佐賀大学推進代表者：穂屋下 茂

- ・事業で使用する基盤システム Moodle の運用を担当している。
- ・英語ワーキング・グループのメンバーで、e-TOEIC の支援を担当する推進メンバーに入っている。
- ・ポートフォリオ・ワーキング・グループのメンバーで、情報共有と活用に向けての準備を行っている。

### 3.5 他者からの評価【添付資料(j), (k)参照】

(1) 「デジタル表現技術者養成プログラム」の実践研究に関して、「平成 22 年度情報教育研究集会 優秀論文賞」受賞。

穂屋下 茂, 中村 隆敏, 高崎 光浩, 角 和博, 大谷 誠, 藤井 俊子, 古賀 崇朗, 永溪 晃二, 久家 淳子, 時井 由花, 河道 威, 米満 潔, 原口 聡史, 本田 一郎, 梅崎 卓哉, 「就業力を育む教育実践～デジタル表現技術者養成プログラム～」, 『情報教育研究集会講演論文集 (京都府民総合交流プラザ 京都テルサ)』(2010-12-11), 340 - 343.

#### 【受賞理由】

※ 情報教育研究集会は、平成 22 年度で終了したため、現在受賞理由を参照することができない。

## 4. サービス、社会貢献

「サービス・社会貢献」に関しては、「教育」の対象者が、「授業を受ける学生」であるのに対して、所属機関の教職員や、他大学・機関に所属する「情報提供」を主としている。「ポートフォリオ・システム学生向け説明会」がここに含まれるのは、本来授業を担当する教員が行うべきことを代行しているということで、「サービス」としている。

### 4.1 所属機関におけるサービス

#### (1) ラーニング・ポートフォリオの講習会

新入生の講習を開催し、学科の担当教員に代わって説明を行っている。それとともに、教員に対しても説明会の開催と、個別の説明を行っている。

- 講師「ポートフォリオ・システム教員向け説明会」4回 (2011/4～5月).
- 講師「ポートフォリオ・システム学生向け説明会」17回 (2011/4～6月).
- 講師「ポートフォリオ・システム教員向け説明会」3回 (2012/4月).
- 講師「ポートフォリオ・システム学生向け説明会」16回 (2012/5月).
- 講師「ポートフォリオ・システム学生向け説明会」11回 (2013/5月).

#### (2) ティーチング・ポートフォリオのメンター

自身がティーチング・ポートフォリオを書いた第3回以降、研修も含めて毎回メンターとして参加している。また、TPミニワークも開催している。

- メンター「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」
  - 第4回 福岡, (2011/3/1-3).
  - 第5回 佐賀, (2011/9/20-22).
  - 第6回 福岡, (2012/2/29-3/2).
  - 第7回 福岡, (2012/9/3-5).
  - 第8回 佐賀, (2012/9/18-20).
  - 第9回 福岡, (2013/8/21-23).

#### (3) 教員免許状更新講習の講師

eラーニングのメンターとして、教員免許状更新講習が開始された当初からインターネット講習には、授業コンテンツの作成やコース設計・運用も含めて携わってきた。教員になってからは、教員免許状更新講習において、ICT活用教育の一環として学校現場で活用できるような「LMS講習」を実施している。

- 「佐賀大学教員免許状更新講習：学校現場で活用できる学習管理システム」

(2011)

○「佐賀大学教員免許状更新講習:学校現場で活用できる学習管理システム(初級編)」(2012)

○「佐賀大学教員免許状更新講習:学校現場で活用できる学習管理システム(中級編)」(2012)

○「佐賀大学教員免許状更新講習:学校現場で活用できる学習管理システム(初級編)」(2013)

#### (4) 学校図書館司書教諭講習の講師

教員免許状更新講習と同様に、学校図書館司書教諭のために、メディアのひとつとしての LMS の知識と、学校現場で活用できるような「LMS 講習」を実施している。

○「学校図書館司書教諭講習:学校図書メディアの構成」(2013)

## 4.2 社会貢献

### (1) 教育情報の共有

今まで佐賀大学行ってきた e ラーニングに関する実践と、活用事例を通して様々な教育の場面での活用方法についての講演や、LMS の使い方を実技を交えて体験する講習会を行っている。講演を聞いた方からの紹介で行った講演もある。

○「e ラーニングの活用事例」の講演【添付資料(l)参照】

広島修道大学(2012)、日本協同教育学会 授業づくり研究会(久留米大学)(2012)、福岡教育大学(2012)

○日本リメディアル教育学会第7回全国大会(2011)

プレカンファレンスセミナー「LMS 講習会」開催

### (2) その他の活動

所属する研究所や学会の活動に参加して、主催する会議や大会の運用の一部を担っている。

○佐賀大学プロジェクト研究所「佐賀大学地域環境コンテンツデザイン研究所」研究員( [http://www.saga-u.ac.jp/kokusai/project\\_shakaibunka2.html](http://www.saga-u.ac.jp/kokusai/project_shakaibunka2.html) )として、国際会議「International Conference on Convergence Content(ICC 2012)」の実施。【添付資料(m)参照】

第1回佐賀大学コンテンツデザインコンテストの実施(2012)

第2回佐賀大学コンテンツデザインコンテストを実施予定(2013.12)

<http://net.pd.saga-u.ac.jp/scdc/index.html>

○日本リメディアル教育学会 役員選挙管理委員 (2013)

○日本リメディアル教育学会第9回全国大会 (2013) 実行委員



## 5. 統合

社会人になって学んだ「教え」の中には、現在の職業観や人生観に大きな影響を与えるものがある。

- 「システム開発」において、常に「汎用性」を意識して開発する。
- プロジェクトの各メンバーが、自分の分担する仕事だけでなく、全体の中の自分の位置づけ（役割）を意識してプロジェクトを推進する。

これらは、その時点での自身の行動を「肯定」されたことによって身につけられたことだと思っている。そして、この教えから、

### 5.1 3つの活動の関連

3つの活動のそれぞれの相互関係に着目し、具体的な行動例を挙げてみると以下ようになる。

#### 【教育と研究】

- 様々な ICT 活用教育に関する情報を、「教育デジタル表現」他の授業で学生に伝える。
- 授業での学生の意見・行動を、実践研究の成果にまとめる。

#### 【研究とサービス・社会貢献】

- 授業で実践している ICT 活用の手法を、学会のみならず、他大学や小中高の教員へも紹介している。
- 学会等で得られた情報は、新しい ICT 活用教育に導入できないか検討している。

#### 【サービス・社会貢献と教育】

- 協同教育の勉強会を通じて学んだことを、授業に取り入れている。
- ティーチング・ポートフォリオのメンターとして得られた情報を、自分の教育活動に取り入れる。

### 5.2 3つの活動の統合

- 教育のために行っていることを、情報共有するために研究を行っている。他に情報提供するためには、その情報の信ぴょう性、妥当性を検証する必要があり、根拠データ（資料）を示して証明しなければならない。
- 研究した成果を多くの人に情報提供することは、他の教員（教える立場の者）の支援を行うことに繋がり、それは、サービス・社会貢献である。
- サービス・社会貢献を行うことにより、社会のニーズを把握し、それを教

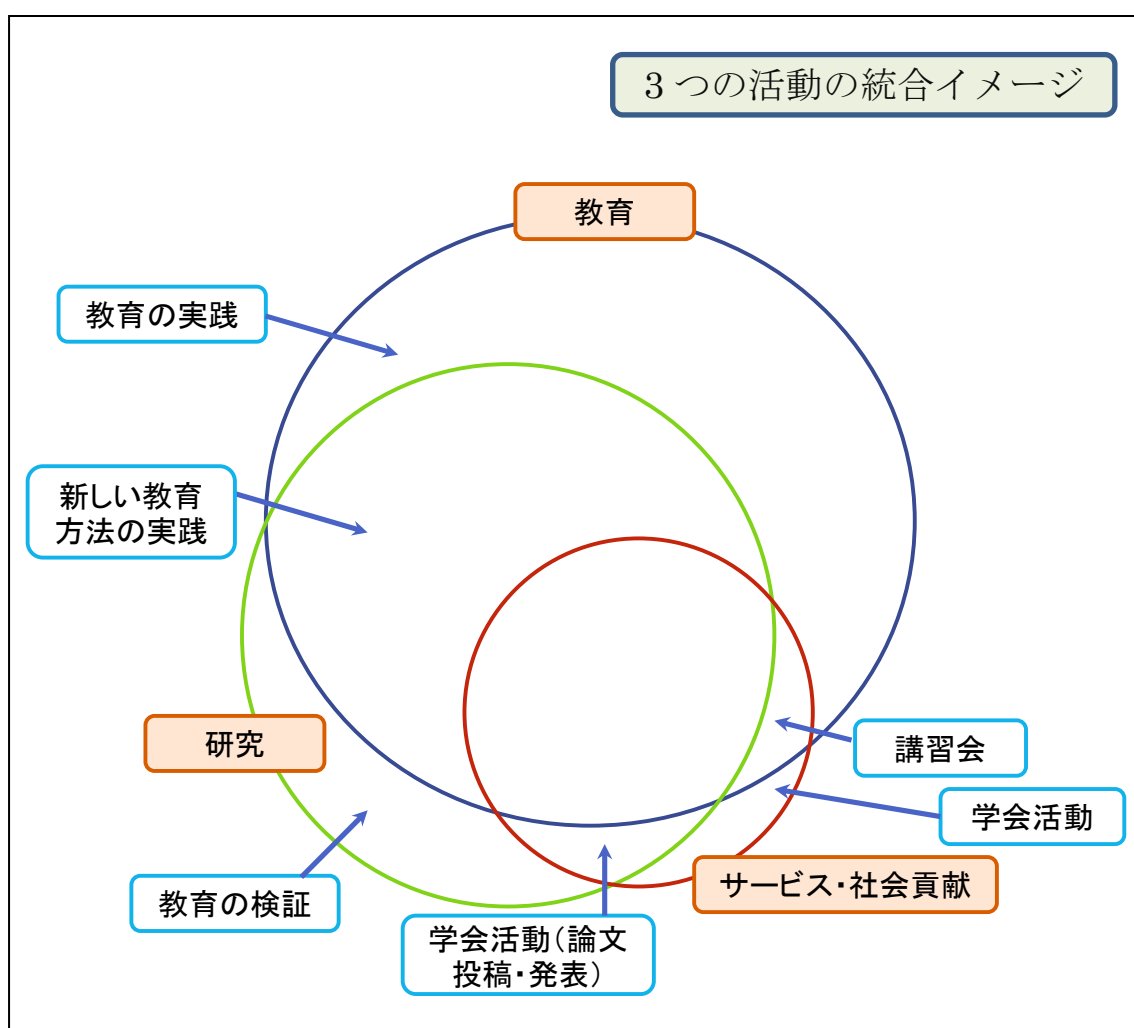
育に取り入れている。

このように考えると、3つの活動は、それぞれの中で大きなサイクルを描くとともに、互いに大きく重なり合って関連付けられている。TPを書いた時の教育の理念は、以下の4つにまとめられた。

- (1) 「学ぶこと」は「生涯学習」である
- (2) ルールの遵守はすべての基本である
- (3) 情報の共有と選択が重要である
- (4) 効果的な教育には支援者が有効である

これらは、教育だけでなく、研究、サービスにおける理念でもある。

一例として、「はじめに」で述べたように「ICT活用教育」では、ICTはツールであるという考えのもとに、ICTを活用して行う教育のひとつとして、LMS構築し、ICTを活用するための教育として、LMS講習会を行っている。



アカデミック・ポートフォリオを書く目的として、現在の自分の業務内容の整理を挙げたが、整理した結果その根底にある考えは、次のようにまとめることができる。

### 『人は生きている限り学び続けている』

「学び」とは、経験を活かすことであり、  
学びには、個人での学びと社会的な人と人に関わることによっておこる学びがある。

小さなものから大きなものまで「学び」はすべて、PDCA サイクル  
Plan (計画) → Do (実行) → Check (評価) → Act (改善)  
で構成され、それが、経験として蓄積される。

自分自身は、恒常的な学びを行っている。そして共に学び続けるために、教育、研究、サービスを行っている。これが、教育、研究、サービスすべてを支える理念である。

## 6. 特に誇りとする3つの成果

### (1) 英語教育でのeラーニングの活用

本学の英語教員（早瀬、ミッチェル）とともに、それまで対面のみで行っていた授業でeラーニングを活用することによって、教育効果が向上した。これは、多くの論文でも示している【添付資料(b-1, 2, 6)他参照】が、担当教員や、学会での口頭発表を聴いて参考にしたという他大学の教員の声を聴くと、これからももっと工夫をして、効果的な学習に貢献したいと思う。

### (2) ICT活用教育を広めること

講演、学会、教員との勉強会・懇談 等で、ICT活用教育について議論することで、教員個人はもとより、大学や学部、学科などの組織で、教育にICTを取り入れ活用し始めるきっかけを提供できている。特に他大学の場合は、導入時の不安を解消するための具体的な事例を求めており、学会発表での「成果」という成功事例より役立つと歓迎されている。

### (3) ポートフォリオの普及

#### ○ラーニング・ポートフォリオ講習会

新入生向けの講習会を毎年開催しているが、学科によって取り扱いが異なり、毎年担当の教員が変わる学科もある。その中で、多くの学生が利用できるように、教員個別に働きかけ、意義を伝えることができている。

#### ○授業科目におけるラーニング・ポートフォリオ

関わっているいくつかの科目で、毎回授業の前後での振り返りを行い、授業と自学学習の振替を記録し、学習管理システムを介してPDFで返却している。いつでも自分の振り返りの記録が参照でき、学期末にはその授業のラーニング・ポートフォリオとして活用できるようになる。学会での発表に対しても、「学習の振り返り」の一手法として評価を得ている。

## 7. 今後の目標

### 7.1 短期目標

#### (1) 英語教育 E-TOEIC の構築

8 大学連携プロジェクトも含めて、現在佐賀大学での英語教育改革に関わっている。e ラーニングで実施する授業外学習の進め方や教材作成、LMS の構築等、個々の英語教員ができないことすべてに携わっているため、早急に運用方法を確立する。

#### (2) 後継者の育成

ネット授業作成の経験を経て、教員のニーズに併せて、授業の進め方や LMS の利用方法を提案したり、運用をサポートしたりする技術を身につけた。ネット授業年間 26 科目のほか、対面の授業のサポートとしては、オンラインディスカッションを行ったり、インストラクショナル・デザインや e ラーニング教材を作成する授業をサポートしたり、また、e ラーニングの普及を通じて、教育改善のサポートを行ってきた。このように、他大学でも先行事例がない e ラーニングのメンター業務を確立してきた。それを他のスタッフに教えているが、もっと系統立てて整理し、教員や教務職員と一体になって学生の教育に貢献できるようなメンター業務の確立ができればよいと思う。今後、より多くの学生や教員のサポートを行うためにも、定期的な講習会の実施や、メンターの育成が不可欠であり、これまでの経験をもとに尽力したい。

#### (3) 教員ポータルサイトでの情報共有

現在、授業方法など教員間の情報交換は、あまり十分とはいえない。そのため授業の良い事例、改善すべき点などを系統立てて紹介する必要性も感じている。いままで、何度か機会を与えていただいて、論文や学会で事例紹介を行ってきたが、今後も良い事例をより系統立てて紹介していくことが、メンターとしての使命でもあると考えている。大学で教育を行う上で共有すべき情報を提供する一元化された場が提供できれば、より情報の共有化が進むと考える。教員なって 1.5 ヶ月であるが、大学に「教員」向けの一元化された情報発信の場がないため、情報収集に非常に苦労している。「与えられない情報＝不要なもの」とばかりに、情報収集を放棄し、「知らなかった」で業務を怠る者もいる。各部や学科などにはあるのかも知れないが、一般的な「教員ポータルサイト」に相当するもので、情報共有ができればよいと考えている。

## 7.2 長期目標

教職協働を、机上の空論ではなく、組織的に実践したい。そして、学生のみならず教員・職員の学修環境を提供できる環境を構築したい。その際、使用するツールとして ICT を活用しながら、協同教育の理念と手法を取り入れたい。

【説明】教育理念を実現するためには、必要不可欠な問題であると同時に、「大学」という教育機関が果たすべき役割には、教職員すべてが一丸となって取り組むべきだと思う。そのための自分の役割は、学生、教員、職員を繋ぐことであり、ICT 活用教育の導入の手助けをすることである。

### (1) 職員の教育への参加

「後継者の育成」では、メンターという職種の人員を育成するという目標を述べたが、本来大学の職員は、教員と一体になって教育に参加すべきだと考える。会社組織では、直接売り上げをあげる「営業職」を「事務職」が全面的にサポートする。「営業職」は「事務職」から見て、会社に利益をもたらす「お客様」であるという考えからくる。大学が「教育」で利益を得ているのであれば、直接授業を行う教員だけでなく、職員も「教育」に参加し教員が教育を実施しやすい環境を作るべきである。

今まで教務職員を経験したことで思うことは、教員と情報を共有し、整理し、率先して情報提供が行える職員を育成するためには、まずは職員に対する ICT 教育が不可欠である。そのため、今までに教員向けに行ってきた講習会を、少しアレンジして職員向けにも開催することができればと考えている。

### (2) ICT 活用教育と協同教育の融合

いままで様々な教育実践を行ってきたが、教育効果を測定する方法が確立できていない。昨年、日本協同教育学会の勉強会に参加し、協同学習を学ぶ機会ができ、「協同学習」の理念に感銘を受け、その手法を学び始めた。あらためて注目を浴びているアクティブ・ラーニングのひとつとして、「協同学習」を自身の教育手法の中に取り入れるとともに、教育学者の中にある「対面授業」神話のなかに、有効に ICT を取り入れることができれば教育効果が上がることを実践で証明していきたい。

## 8. 添付資料・参考資料

- (a) 業務経歴・履歴書
- (b) 論文リスト（研究業績）
  - (b-1) 論文「eラーニングを用いた英語教育における音声提出課題の効果」
  - (b-2) 論文「アカデミック・イングリッシュ向上のためのeラーニング教材作成授業の試み」
  - (b-3) 論文「授業におけるLMS活用の実践事例－LMS利用促進を目指した授業－」
  - (b-4) 口頭発表論文「教養教育科目における自学学習と講義の振り返り実践報告」
  - (b-5) 口頭発表論文「デジタル表現技術者養成プログラムにおける修了研究の評価方法の検討」
  - (b-6) 口頭発表論文「e-TOEIC コース開講に向けてのシステム構築 ～佐賀大学版 Pre-TOEIC の実施～」
- (c) 教育および教育支援の実績について
- (d) ティーチング・ポートフォリオ（2013年9月更新）
- (e) 2013年度教育デジタル表現のシラバス
- (f) 「デジタル表現技術者養成プログラム」履修の手引き（第5期生）
- (g) eラーニングのメンター業務について（メンター業務の改善）
- (h) 申請書、平成24年度報告書
- (i) 科研申請書、A判定インセンティブ結果報告書
- (j) 論文賞賞状
- (k) 口頭発表論文「就業力を育む教育実践 ～デジタル表現技術者養成プログラム～」
- (l) 講演資料『佐賀大学におけるeラーニングの活用事例』、依頼文等
- (m) 平成24年度活動報告書